

## 妄想病院

N氏は通い慣れた道を進み、ゴールドの装飾の施された荘厳なドアの前に立つ。

ドアは静かに横にスライドし、気持ちよくN氏を迎え入れる。

「いらっしゃいませ。」

静かに、しかしきちんと発音された透き通るような声が、すぐにN氏の耳に届く。

「お待ちしておりました。」

訓練されつくした兵隊のように数人の若い女性が決められた角度でお辞儀をする。

「うむ。」

N氏は軽く右手をあげ、ソファアーに腰をかける。

「ご予約のN様ですね。こちらへどうぞ。」

さすがだ。完璧といつてもいい。

考えてみれば今からほんの数年前までは、病院といえば薬臭く、医者や看護師がバタバタ動き周り、子供の泣き声や老人のむせる声、そして長い待ち時間が当たり前だった。

その上医者は偉そうで、契約とかビジネスという観点には無頓着。病気を治すことにしか興味がなく、サービス業という意識がほとんどなかった。それに比べると今は別世界だ。

きちんと決まった予約時間。最高のサービス、最高の設備。

そして何より親切的な医者と看護師。

一流のホテルに匹敵するサービスぶりだ。

「良い時代になったものだ。これこそが患者中心の医療だな。」

N氏はそう言つと診察室に向かって歩きはじめた。

「これはこれはN様。ようこそおいで下さいました。」

医者が笑顔で迎える。これもいつも通りだ。

「本日はいつものように検診ということですのでよろしいでしょうか？」

医者ほもみ手をし、満面の笑みを浮かべている。

「いや、今朝から腹がひどく痛む。検査をしてほしいんだ。」

「かしこまりました。ではまずCT撮影からはじめさせていただきます。」

一通りの検査が終わり、待合室で痛む腹を押さえながら待っていると、担当の医者がカルテを持ってやってきた。

「N様、結果をお話させて頂きます。実は胃に異常が見つかりまして、更に精密検査をしたところ、早急に治療の必要があるということがわかりました。」

医者は淡々と現状を説明した。

「そんなに悪いのか。そういうことなら急いで治療を頼む。」

N氏は不安を隠し切れず、いつになく早口になっていた。

「かしこまりました。但しN様のご入会の保険は検診中心保険ですから、今回の治療をお受けになる際にはご使用になれません。救急特別安心保険というのが御座いますが、今から担当の者を選んで説明させましょうか?」

「そんな余裕はない。早くなんとかしてくれ。痛みが増してきた。」

N氏の不安と痛みはさらに高まっていった。

「そうなりますと、全額自費ということになります。よろしいでしょうか?」

医者はいかにも申し訳ないという表情を作り上げ、もみ手をしながらN氏に迫った。

「ああ、それでいい。早くなんとかしてくれ。なんだか意識が遠くなってきた。」

N氏の顔色は見る見る青くなっている。

しかしそんなことはおかまいなしに医者のもみ手はさらに続く。

「了解いたしました! ではまずこの契約書の3ページから187ページまでをお読み頂き、納得されましたらサインをお願い致します。」

「今は読めない。痛みで意識が飛びそうなんだ。頼む、まずは処置をしてくれ・・・」  
N氏は必死に医者に訴えた。

「とんでもございません! 契約なしに薬ひとつお出することもできないのです。きちんと書類が揃ってないと、当局から厳しい罰則が御座います。ささ、お読みになって下さいませ。」

医者は分厚い契約書をN氏の目の前につきつけ、ページをめくり始めた。

「はあはあ・・・よ、読んだ・・・。サインもした・・・。さあ頼む・・・治療を・・・」

医者はそのサインを食い入るように確認し、

「はいOKです。では次に処置の方法とリスクについてご説明させて頂きます。前半は処置に対するリスク。後半は薬のリスク、副作用などです。お聞きになった後に御納得いただければサインをお願いします。」

医者は苦しそうなN氏を全く気にする様子もなく、棒読みで処置や薬のリスクを読み上げた。

「聞いた・・・聞いたぞ・・・。サイン、サ、サインをする・・・頼む処置を・・・」

N氏は痛みで意識がほとんどなくなる寸前になっていた。

「N様ががんばって下さい。あと少しです。只今からご本人様確認のために本籍、住所、電話番号、生年月日、クレジットカード番号をお聞きます。それにお答え頂ければ、治療に入ります。」

医者は当局と繋がった端末を取り出し、カチカチとキーボードを打ち始めた。

「ほ、ほ、本籍は・・・・・・・・・・」

N氏はそこまで答え、とろとろ力尽きその場に倒れこんでしまった。

「いかかですか。院長。当社のモンスターペイシエント対策マシンは？」

「うむ。素晴らしい。あのマシンでバーチャル体験をした患者さんは目覚めた後から ”あの体験が夢でよかった。ホテル並のサービスなんてなくても、必要な医療が必要な時に受けられるって、それだけですばらしい” と言っ様になった。すごいことだ。」

「左様でございますか。まあ今は医療保険なんて水や空気のようにあって当たり前、医者は病気を治して当たり前と思ってますからね。お役に立ててなによりです」

「ただ、マシンに乗っている間に、様態が本当に悪くなる人がいるのが玉に瑕だが。」

「ところで、その場合は医療訴訟の免責になるんだろうな？」

おしまい

2008/08/19